

No.59 エステル・アルバルダネ 「タチカワの女たち」

Esther Albardané

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年 5月1日付 立川市市報記事より

エステル・アルバルダネは「タチカワの女たち」のような彫刻も作るけれども、平面の作品の魅力はまた格別だ。彼女の作品からは絵のもつ温かさや、人間同士のコミュニケーションへの痛切な思いが伝わってくる。

先日も釧路市で開催された個展で100点以上もの作品を見てきたが、美術のもつすばらしさが初めて見る人々にも感動を呼び起こしていた。

ファーレでの5組の彫刻には、犬と一緒にいたり、月のような形がくっついたりしているが、それらから伝わってくるものも、人や動物や物体との親密なつながりへの憧れであり、すべての者たちが共存する世界への願いではないかと思う。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

昨年10月のこと、私はアートフロント・ギャラリーの招きで再開発地域ファーレ立川を訪ね、この地域を美術と現実の日々の生活との融合の場としてつくりかえる、という計画に参加するようにと勧められました。その考えは最初の瞬間からこの上なく私の関心をひくものでした。しかし、このプロジェクトの模型や建設中の現場を見るまで、自分がどのようにこの計画に貢献できるのかわかりませんでした。

私はこの街の関係性を持つべき人々を想像してみました。つまり仕事へと街路を行きかう女性や男性を。

その時私は熱い一筆をもって加わることができるかもしれないと思ったのです。そして逆説的に思えるかもしれませんが、もっとたくさんの人物を登場させることが、私が寄与できることではないかと思いました。それは時にはコミカルな表現になるかもしれません。

これらのアイデアを形にするために使用する材料は、酸化鉄と、彫像の身振りにアクセントを添える絵具です。こうして私は地中海的な活気を作品に映し出そうとしているのですが、同時に、金属板を折り曲げて作り上げることで、これらの非常に東洋的な特性、すなわち慎ましさを与えています。

見る位置によって“タチカワの女たち”は消え、一つの線に変わります。それはより一層生身の人間を感じさせることになります。(私たちはいつも傍らにいる人間ばかり見ているのではないですか)。友達とおしゃべりしたり、犬と戯れたり、子供の手を引いたり、“タチカワの女たち”は生きた人間として立ち現われてくるように工夫されています。

彫像は(バルセロナの)マタローというところで制作しています。

仕上がってしまえばこの上もなく単純に見えるのですが、これを作り上げるには職人の偉大な熟達した腕が必要です。厚さ3センチの板を折り曲げたように見せるのはたやすいことではないのです。

裁断され、表面を迅速に酸化させるために砂で処理を施した板は、ある箇所は曲げ、ある箇所は溶接します。

最初の仕上げが終わり、酸化した後、何層にも上薬がかけられ、色が塗られます。

最後の仕上げが終わると、非常に美しい艶消しの表面が出来上がります。

“彼女たち”みんなが仕上がってそろったのを見て、私は思います。

彼女たちの後ろに誰かがいる! と。

そうです。ジョアン・ミロです。それも不思議なことではありません。

彼こそ、私と同世代の芸術家たちすべてに何かを伝えてくれた、偉大なるカタルーニャの芸術家なのです。